

ラオデキア - ナンバーワン

幻の谷に対するイザヤの滅びの預言

Jeff Pippenger

2023-08-14

幻の谷に関する託宣. いま、おまえに何が起こったのか. なぜ皆こぞって屋上に上ったのか. 騒ぎに満ち、騒然たる都、喜びの都よ. おまえの倒れた者たちは剣に倒れたのではなく、戦いで死んだのでもない. おまえのすべての支配者は皆、共に逃げ去り、弓を引く者たちに捕らえられた. おまえのうちで見いだされた者は皆、遠くへ逃げた者でさえ、一様に縛られた. ゆえに私は言った、「私から目をそむけてくれ. 私は激しく泣こう. わが民の娘が略奪されたゆえ、私を慰めようと努めるな.」それは、万軍の主なる神による、幻の谷における苦難と踏みにじりと混乱の日、城壁が打ち壊され、山々に向かって叫びがあがる日である. イザヤ書 22:1-5.

イザヤ書では、“burden” という語が18回見られる. そのうち11箇所は滅びの預言を直接に指しており、残りの7箇所は肩に担われる負い荷を指している. “burden” と訳されている箇所のうち、肩に担うものを表すと同時に滅びの預言でもあるのは、ただ1箇所だけである. 私は、担われるものを指すヘブライ語の語でありながら同時に滅びの預言でもある、そのただ1つの箇所を扱うつもりなので、最初にこの区別を示しておくが、これらの事実に戻るのには後になる.

その章は「幻の谷」の定義について曖昧ではない. というのも、それは「ダビデの町」であり、また「エルサレム」として示されているからである. 幻の谷は、ダニエル書11章の最後の六節に描かれる歴史におけるラオディキアのアドベンティズムを指している. イザヤは、この滅びの文脈を設定するにあたり、第二十章に示された歴史として、アッシリアの王がエジプトにあるアシュドドという都市を奪うためにタルタンという名の軍司令官を派遣し、世界を段階的に征服していくさまを描写した.

日曜法はダニエル書11章41節に示されており、そこでは日曜法の時に教皇権の支配から「逃れる」三つのグループが特定されている.

タルタンがアシュドドに来た年（アッシリアの王サルゴンが彼を遣わしたとき）、彼はアシュドドと戦い、これを攻め取った. その時、主はアモツの子イザヤによって語られた、「行って、腰の荒布を解き、足から履物を脱げ.」彼はそのとおりにして、裸で裸足のまま歩いた. 主は言われた、「わがしもべイザヤが、エジプトとエチオピアに対するしるしと不思議として、三年の間、裸で裸足のまま歩いたように、そのように、アッシリアの王は、エジプト人を捕らわれ人として、エチオピア人を捕虜として、若者も老人も、裸で裸足で、その尻までもあらわにして、エジプトの恥となるように引いて行く.」彼らは、自分たちの望みとしていたエチオピアと、自分たちの誇りとしていたエジプトを恐れ、恥を見る. その日、この島の住民は言う、「見よ、これが私たちの望みであったところ、すなわち、アッシリアの王から救いを得ようとして助けを求めて逃れた先であったのに. では、どうして私たちは逃れ得ようか.」イザヤ書 20:1-6.

その島の住民が投げかける問いは、ダニエル書11章で北の王としても表されるアッシリアの王から、どのように逃れるのかということだ。

彼（北の王）は麗しの地にも入り、多くの国々は打ち倒される。しかし、エドム、モアブ、そしてアンモンの子らの首長たちは彼の手を免れる。ダニエル書11章41節。

この節では、アメリカ合衆国における日曜法が示されており、ダニエル書の該当箇所には検討に値する微妙なニュアンスがいくつかある。ダニエル書11章40節から43節には、「国々」を示す連続した三つの節がある。40節では、旧ソ連を表す諸国が1989年に教皇権とアメリカ合衆国によって一掃された。現代の歴史家たちもこの事実を確認している。

そして四十二節では、北の王（教皇権）が全世界を象徴するエジプトを征服する場面で、「国々」という語が地球上のすべての国々を指していることがわかります。これが含意の一つです。私がこの三つの節について述べている二つの含意のもう一つは、四十一節と四十二節に出てくる「逃れる」という語に関わるものです。どちらも「逃れる」と訳されていますが、ヘブライ語では異なる二つの語です。四十二節で「逃れる」と訳されているヘブライ語は「救い出しが無い」という意味であり、国連を表す「十人の王」が自分たちの世界統一政府を教皇権の獣の支配下に委ねることに同意するとき、逃れはなく、救い出されることもないのです。

あなたが見た十本の角は十人の王であり、彼らはまだ王権を受けていないが、獣と共にひとときのあいだ王としての権威を受ける。彼らは思いを一つにし、自分たちの権力と力を獣に与える。彼らは小羊と戦うが、小羊は彼らに打ち勝つ。彼こそ主の主、王の王であり、彼と共にいる者たちは、召され、選ばれ、忠実だからである。彼はまた私に言った。「あなたが見た、あの淫婦が座している水は、もろもろの民、群衆、諸国民、諸言語である。あなたが獣の上に見た十本の角は、この淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせて裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす。というのも、神はご自身のみこころを成し遂げるため、彼らの心に同じ思いを与え、神の言葉が成就するまで、自分たちの王権を獣に渡すことに同意させたからである。」 ヨハネの黙示録
17:12-17

これらの「十人の王」は、神の言葉の中で繰り返言及されている。また、エリヤの物語では、イスラエルの王アハブは十部族の長であり、イゼベルと結婚していた。イゼベルは世の終わりにおける教皇権を表し、エリヤは第三の天使のメッセージの使者たちを表し、アハブは十人の王からなる同盟の長を表す。アハブは、日曜法の預言的歴史において、国際連合の指導者としてのアメリカ合衆国を表している。エジプトがアッシリアによって征服されるとき、ダニエル書11章42節の北の王は、十人の王たちに自分たちの王国を教皇権に引き渡すことに同意させたばかりである。

最後の危機に近づくにつれて、主の器たちの間に調和と一致が存在することは死活的に重要である。世界は嵐と戦争と不和で満ちている。しかし、一つの頭-すなわち教皇権-のもとで、人々は神の証人たちを通して現れる神に敵対するために一致するであろう。この結合は大いなる背教者によって固められる。彼は真理に対する戦いにおいて自分の手先たちを結束させようとする一方で、その擁護者たちを分裂させ、散らそうと働く。嫉妬、邪推、中傷は、彼によってそそのかされ、不和と分裂を生じさせる。『

証言』第7巻、182頁.

41節には「逃れる」という語が見られ、42節にも「逃れる」という語が出てきますが、これらはヘブライ語では異なる二つの語です。41節で「逃れる」と訳されている語は、まるで滑って抜け出すかのように逃れる、という意味です。これは、イザヤ書20章6節で「逃れる」と訳されている語でもあります。「その日」には、「この島の住民」が、ダニエル書11章や他のいくつかの聖書箇所にも描かれているように、「その日」に世界を次々と征服していくアッシリア人からどうすれば逃れられるのかと問います。

ダニエル書11章41節では、教皇権（ダニエルは彼を「北の王」、イザヤは彼を「アッシリア人」として表している）が、アメリカ合衆国を表す「麗しの地」を征服しているとき、二つのグループが特定される。

彼はまた麗しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

一方は打ち倒される「多くの者」で、もう一方の群れは「エドム、モアブ、アンモンの子らのかしら」として表されている。日曜法の時、黙示録18章4節は、バビロンにまだいる者たちに「出て来なさい」と呼びかける。

また、わたしは天から別の声がこう言うのを聞いた。「わたしの民よ、彼女から出てきなさい。彼女の罪にあずからないように、また、彼女の災いを受けないように。」ヨハネの黙示録 18:4.

エドム、モアブ、そしてアンモンの子らの首長は、すり抜けて逃れる者たちであり、イザヤ書二十章の島の民がそうしようと望んでいるのと同様である。

第41節について私が指摘しているもう一つの点は、第40節、第41節、第42節では“countries”という語が見られるが、第41節のそれは補って訳された語であり、ダニエル書の原文にはなく、そこに置かれるべきものではないということである。ソ連崩壊に際し、第40節の成就として多くの国々が打ち倒され、また、教皇権が国連を掌握するときにも多くの国々が制圧される。しかし、アメリカ合衆国におけるサンデー法の時、打ち倒される「多くの者」は、多くの国々ではなく、セブンスデー・アドベンチストだけに限られる。

もし、第四戒の安息日を明らかにし、日曜日を守ることに神の言葉のうちに何の根拠もないことを示す真理の光があなたに示されているのに、それにもかかわらず偽りの安息日に固執し、神が「わが聖なる日」と呼ばれる安息日を聖とすることを拒むなら、あなたは獣の刻印を受ける。これはいつ起こるのか。日曜日に労働をやめて神を礼拝するよう命じる布告に従うとき、しかも、日曜日が普通の労働日とは異なる日であることを示す言葉が聖書には一言もないと知っていながら、あなたは獣の刻印を受けることに同意し、神の印を拒むのである。Review and Herald, 1897年7月13日

セブンスデー・アドベンチスト教会のすべての会員は、最初に洗礼を受けて教会員となった時に安息日の教義を受け入れており、安息日に関する「真理の光」に照らして責任を問われる。

安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし、あるいは印である。第四戒の要求を理解しながら、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選ぶ者は、そうすることによって、それを唯一命じている権力に敬意をささげていることになる。獣の刻印は教皇制の安息日であり、それは神が定められた日の代わりに世界によって受け入れられてきた。

まだ誰も獣の刻印を受けていない。試練の時はまだ来ていない。あらゆる教会に真のキリスト者がいる。ローマ・カトリックの交わりも例外ではない。光を受け、第四の戒めの義務を悟るまでは、誰も断罪されない。だが、偽りの安息日の遵守を強制する布告が発せられ、第三の天使の大いなる叫びが人々に獣とその像の礼拝に対して警告するとき、偽りと真実との間に明確な一線が引かれる。そのとき、なおも背き続ける者たちは、獣の刻印を受けることになる。

私たちは急速にこの時期に近づいている。プロテスタントの諸教会が、かつてそれに反対したためにその祖先が最も激しい迫害に耐えたような偽りの宗教を支持するために、世俗の権力と結合するとき、そのとき、教会と国家の連合した権威によって教皇制の安息日が強制されるだろう。国家的背教が起こり、それは国家的破滅に至るほかない。原稿51、1899年。

日曜法の時に第三天使の光に対して責任を問われるのはセブンスデー・アドベンチストだけである。というのも、アドベンチスト以外の人々に第三天使の試練が提示されるのは、その時になって初めてだからである。日曜法で「多くの者」が倒されるが、それはラオデキヤ的なアドベンチストである。なぜなら、「裁きは神の家から始まる」からである。

このように、後の者が先になり、先の者が後になる。招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。マタイによる福音書 20:16

イザヤは、教皇権による世界の漸進的征服に関して、エジプトとエチオピアにとっての「しるしと不思議」である。エジプトは国際連合、エチオピアはアメリカ合衆国、アッシリアは教皇権を指す。そのような預言的歴史の文脈において、イザヤは一連の破滅の預言を述べ始める。第二十二章は、日曜法において打ち倒されるラオデキヤ人と、バビロンから「エドム、モアブ、アンモンの子らのかしら」を呼び出すフィラデルフィア人について述べている。

ラオデキヤ的なアドベンチズムは、救われるために必要な品性を欠いており、日曜法のとくに主の口から吐き出される。私はこの事実に触れるのは、次の点を強調するためにほかならない。イザヤ書二十二章は、ラオデキヤが失われるもう一つの理由を示している。というのも、滅びの預言は「幻の谷」に対して語られているからである。「幻」と訳される主要なヘブライ語は二つある。一つは預言的な出来事の順序を表し、もう一つはキリストの幻を表す。一方は教会の外的なもので、もう一方は教会の内的なものである。二十二章の語は、預言的な出来事を表す「幻」であり、箴言で「幻」と訳されている語と同一である。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18.

「幻の谷に関する託宣」とは、世の終わりにおける神の教会の中の二つの礼拝者の階級を指し示す預言である。一方の階級はシェブナに代表されるラオディキアであり、もう一方はヒルキヤの子エリヤキムに代表されるフィラデルフィアである。この章における二つの階級の区別は、言うまでもなく、十人の乙女のたとえにおける区別と同じである。一方は真夜中に油を持ち、もう一方は持たない。「油」という象徴は、それが置かれている文脈によって異なる真理を表すが、イザヤ書二十二章では、十人の乙女の「油」は「幻」という語で表されている。一方は「油」を持ち、もう一方は持たない。

全地の主のそばに立つ受膏者たちは、かつてサタンに与えられていた守りのケルブとしての地位を持っている。御座を取り巻く聖なる存在たちを通して、主は地に住む者たちと絶えず交信を保っておられる。黄金の油は、神が信者のともしびを満たし続け、揺らいで消え去ることのないようにされる、その恵みを表している。もし神の御霊の告げることばにおいてこの聖なる油が天から注がれなければ、悪の諸勢力が人を完全に支配してしまうだろう。

私たちが神から送られるみ告げを受け取らないとき、神は辱められる。こうして、暗闇の中にいる者たちに伝えられるために、神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を、私たちは拒んでしまう。「見よ、花婿が来る。出て行って彼を迎えよ」という呼びかけが来るとき、聖なる油を受け取らず、心にキリストの恵みを大切にしていなかった者たちは、愚かな乙女たちのように、自分たちが主をお迎えする備えができていないことに気づくであろう。彼らには、その油を得る力が自分自身の内にないので、彼らの人生は難破してしまう。しかし、もし神の聖霊を求め、モーセがそうしたように「あなたの栄光を私に見せてください」と嘆願するなら、神の愛は私たちの心に豊かに注がれる。黄金の管を通して、黄金の油が私たちに注がれるであろう。「権勢によらず、力によらず、ただわが霊によって」と万軍の主は言われる。義の太陽の輝く光線を受けて、神の子どもたちは世にあって光として輝く。Review and Herald, 1897年7月20日。

預言者たちの霊は互いに一致しており、ゼカリヤの二人の油注がれた者は、黙示録十一章の二人の証人でもある。

「二人の証人について、預言者はさらにこう述べている。『これらは二本のオリーブの木、また地の神の御前に立っている二つの燭台である。』『あなたのみことばは、わが足のともしび、わが道の光です。』と詩編記者は言った。黙示録11章4節；詩編119編105節。この二人の証人は、旧約と新約の聖書を象徴している。いずれも、神の律法の起源と永続性についての重要な証しである。いずれもまた、救いの計画の証しでもある。旧約の型、犠牲、そして預言は、やがて来られる救い主を指し示している。新約の福音書と書簡は、型と預言によって前もって告げられたとおりの正確なしかたで来られた救い主について語っている。」『The Great Controversy』267ページ。

ゼカリヤの二人の油注がれた者は、黙示録1章で示されている伝達の過程を表している。「油」とは、歴史的出来事に関する預言的な「幻」のことであり、それは旧約聖書と新約聖書を通して伝えられる。黙示録11章では、この二人の証人は文脈上モーセとエリヤと特定される。モーセとエリヤはそれ自体が象徴である。

変容の山や黙示録11章におけるように二人がともに現れるとき、それは二つの異なる真理の象徴となる。変容の山では、彼らは日曜法の危機のさなかの殉教者たちと十四万四千人を表し、いっぽう黙示録11章では旧約聖書と新約聖書を表す。だがアドベンチズムにとっては、彼らはそれ以上の意味を持つ。ユダヤ人にとっての二人の証人は旧約聖書を代表する「律法と預言者」であり、キリスト者にとっての二人の証人は旧約聖書と新約聖書であった。だがアドベンチズムにとっての二人の証人は、神の言葉とイエスの証しである。これが、ヨハネがパトモス島にいた理由である。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、苦難における仲間、そしてイエス・キリストにある御国と忍耐にあずかる者として、神の言葉のため、またイエス・キリストの証のために、パトモスと呼ばれる島にいた。黙示録 1:9

イザヤ書二十二章には、モーセとエリヤの二人の証人が表されている。ただし、それはその章に「アルファとオメガ」の原則を適用した場合にのみ認識できる。エマオへ向かう道で、イエスが弟子たちに預言的な出来事の「幻」の説明をどこから始めたのかを考えてみなさい。

「聖書史のまさに始まりであるモーセから始めて、キリストは、聖書全体においてご自身に関する事柄を説き明かした。」 Desire of Ages, 796.

エリヤは、主の大いなる恐るべき日が来る前に現れる預言者であり、アルファとオメガの原理に基づくメッセージを携え、父の心（アルファ）を子どもたち（オメガ）に向けさせる。モーセとエリヤは、聖書の預言におけるアルファとオメガを表している。もしこれを受け入れられるなら、モーセはウィリアム・ミラーであった。モーセもミラーも死んだが、どちらも啓示によって救われた者と示されている。モーセはもちろん死後すぐに復活したが、ミラーの復活までは天使たちが彼の墓の周りで待っている。エリヤは、主の大いなる恐るべき日が来る前の最後の使者を表している。

ユダヤ人たちは、神の御言葉において預言されていたメッセージが宣べ伝えられるのを妨げようとした。しかし、預言は必ず成就する。主は言われる、「見よ、わたしは主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす」（マラキ4:5）。エリヤの霊と力をもって来る者がいるはずで、その者が現れると、人々はこう言うかもしれない。「あなたは熱心すぎる。あなたは聖書を正しく解釈していない。あなたのメッセージをどう伝えるべきか、私が教えてあげよう。」

神のみわざと人のわざを区別できない者が多くいる。私は、神が私にお与えになるままに真理を語る。いま言うが、もしあなたがたがあら探しをし、不一致の霊を抱き続けるなら、あなたがたは決して真理を知ることはない。イエスは弟子たちに言われた、「わたしには、なおあなたがたに言うべきことが多くあるが、今はそれに耐えることができない」（ヨハネ 16:12）。彼らは聖なる永遠の事柄を理解して受け止める状態にはなかった。しかしイエスは、助け主を遣わすと約束された。その方は、すべてのことを彼らに教え、イエスが彼らに語られたことをことごとく思い起こさせてくださるのである。兄弟たちよ、私たちは人間に頼ってはならない。「鼻で息をする人間に頼るのをやめよ。彼に何の価値があろうか」（イザヤ 2:22）。あなたがたは自分の無力な魂をイエスに委ねなければならない。山に泉があるのに、谷の泉から飲むのは私たちにふさわしくない。低い流れを離れ、高い泉に行こうではないか。もしあなたがたに

理解していない、また一致していない真理の点があるなら、よく調べ、聖句を聖句と比較し、神の御言葉という鉱山に真理の堅坑を深く下ろしなさい。あなたがたは自身と自分の意見を神の祭壇にささげ、先入観を捨て、天の御霊にすべての真理へとあなたがたを導いていただきなさい。『Selected Messages』第1巻、412。

イザヤ書22章では、北の王がエルサレムに向かって進軍している世の終わりに、シェブナとエルヤキムはアドベンチズム内部の賢い者と愚かな者を表している。ヒルキヤの子エルヤキムは「幻」を持っていたが、シェブナは持っていなかった。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18。

この節の「幻」、すなわち預言のメッセージは二つの点を扱っている。預言の光の増大を理解すれば生き、理解しなければ死ぬ。理解しないなら、日曜法の試みのときに安息日を守るための備えができない。その時には「手遅れ」になる。ラオデキア的アドベンチストたちが日曜法で倒れるとき、彼らは「真理の幻」を退けたがゆえに律法を拒む。彼らには油がなく、恩恵期間が閉じられる直前に封印が解かれて増し加わる知識を理解しない。

なぜなら、あなたは「私は富んでおり、財産が増え、何も必要としていない」と言い、自分が惨めで、衰れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らないからである。黙示録 3:17。

イザヤのしるしとは、彼が三年間、裸で裸足で歩いたことである。彼がそうしたのは、彼の預言的なメッセージによって警めを受ける者たちに警告するためであり、もし預言的出来事の幻を理解しなければ、あなたがたは日曜法に至り、みじめで衰れで、貧しく、盲目で、裸の状態で連れ去られる捕囚となる、ということを示すためであった。イザヤはイザヤの時代においてしるしと不思議であったが、世の終わりに対してはなおさらである。

これらのことは皆、彼らに起こったのは、私たちに対する模範としてであり、また、それらは、世の終わりが臨んでいる私たちへの戒めとして書き記されたのです。コリント人への第一の手紙 10章11節。

第二十二章の最初の五節では、エルサレム、すなわちダビデの都が、「騒然たる」「喜びの都」、すなわち「騒ぎ」に満ちた都として示されている。十三節で人々が喜びつつ「食べ、飲もう。明日は死ぬのだから」と言うとき、世の人々でさえ用いる古典的な聖書の言葉が、その「喜びの」「騒然たる」「騒ぎ」に満ちた都を表すものとして引かれている。それにもかかわらず、彼らは喜んでいるが、彼らの男たちは殺されている—しかし剣によるのでも、戦いにおいてでもない。ゆえにイザヤは「どうしたというのか」と問いかける。

何が彼らを苦しめているにせよ、そのせいで彼らは屋上へ上ってしまった。屋上は太陽や月、星の礼拝を象徴し、心霊主義の象徴でもある。この箇所では、アドベンチズムは霊的な惑わしのもとにある。

また、屋上で天の万象を拝む者、主にかけて誓いながら、マルカムにかけても誓う者、主から背き去った者、主を求めず、主に尋ね求めなかった者たち。

主なる神の御前で黙せ。主の日は近いからである。主はいけにえを備え、その客を招かれた。主のいけにえの日には、私は高官たちと王の子ら、また異国風の衣をまとっている者すべてを罰する。その日にはまた、敷居を跳び越え、主人たちの家を暴虐と欺きで満たしている者を私はことごとく罰する。ゼパニヤ 1:5-9。

日曜法の危機において、エルサレムとして表されるアドベンチズムは「幻の谷」にある。「油」または「幻」によって表される預言的メッセージを拒む者たちは、心霊主義を實踐しており、それについてはパウロがテサロニケ人への第二の手紙で扱っている。そこでは、真理への愛を受け入れなかった者たち（シェブナ）も見いだされる。

このゆえに、神は彼らに力ある感わしを送り、彼らが偽りを信じるようにさせる。これは、真理を信じずに不義を喜んだ者が皆、罪に定められるためである。テサロニケ人への第二の手紙 2章11、12節

もちろん、パウロが用いる「真理」という語は、ヘブライ語の「真理」という語に由来するギリシャ語であり、そのヘブライ語はアルファとオメガを表す三つのヘブライ文字を組み合わせて作られている。アルファとオメガの原理として表される「真理」を拒むことは、ラオデキア人に強い感わしをもたらし、その感わしとは心霊主義である。

預言者イザヤは言う。「彼らがあなたに、『口寄せの者や、ささやきつぶやく呪術師のところを尋ねよ』と言うとき、民は自分の神に求めるべきではないか。生きている者が、死者のことで死者に伺うのか。律法と証しに従え。もし彼らがこの言葉に従って語らないなら、それは彼らのうちに光がないからだ。」イザヤ書8章19、20節。もし人々が、人間の本性と死者の状態について聖書にこれほど明白に述べられている真理を進んで受け入れていたなら、彼らは心霊主義の主張と現れの中に、力としるしと偽りの不思議をもって働くサタンの働きを見ていたであろう。しかし、肉の心にかくも心地よい自由を手放し、愛している罪を捨てるよりは、多くの人々は光に目を閉じ、警告を顧みずにまっすぐ進み続ける。その間にサタンは彼らの周囲に罟を編みめぐらし、彼らはその獲物となる。「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったので」、それゆえ「神は彼らに強い感わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」第二テサロニケ2章10、11節。『大いなる論争』559。

イザヤ書二十二章では、喜びの都の人々は殺されるが、戦いでも剣でもなく、彼らは逃げた指導者たちとともにひとまとめに縛られて殺される。

教会が世と同様の道を歩むなら、同じ運命をたどることになる。いやむしろ、より大いなる光を与えられているのだから、教会の受ける罰は、悔い改めない者たちの受ける罰よりもいっそう厳しいものとなる。

私たちは一つの民として、地上のほかのどの民にも先んじて真理を有していると公言している。ならば、私たちの生活と品性は、そのような信仰と調和していなければならぬ。天の穀倉のために尊い穀物が束ねられるように、義人が束ねられるその日は、まさに私たちの目前に迫っている。一方、悪人は毒麦のように、最後の大いなる日の火のために集められる。しかし、小麦と毒麦とは「収穫まで共に育つ」。

『Testimonies』第5巻、100頁。

イザヤ書二十二章における指導層は、「弓兵たち」によって束ねられている。シェブナは家の管理を担う指導者として示されており、その地位はヒルキヤの子エリヤキムに与えられることになる。イザヤ書二十二章では、預言的出来事の「幻」として示されたメッセージが、北の王が迫る中で、エルサレムに二種類の礼拝者を生み出した。一方は天の穀倉のために束ねられ、もう一方は終わりの日の火のために束ねられている。悪しき者たちを縛っているものは「弓兵たち」であり、それは神の言葉においてイスラムを表す多くの象徴の一つである。

ケダルの子らの勇士である弓を射る者の数の残りは、少なくされる。イスラエルの主なる神がそう語られたからである。イザヤ書 21:17

そして、イシュマエルの子らの名は、彼らの系図に従えば次のとおりである。イシュマエルの長子ネバヨテ、ケダル、アドベエル、ミブサム、ミシュマ、ドマ、マッサ、ハダル、テマ、エトル、ナフィシュ、ケデマ。これらがイシュマエルの子らであり、彼らの町々と皆ごとと呼ばれた彼らの名である。彼らはそれぞれの民族に従う十二の族長であった。創世記25章13-16節。

アドベンティズムの指導部は、聖書の預言の成就として2001年9月11日にイスラム教がアメリカ合衆国を攻撃したというメッセージを退けたとき、弓兵によって縛られた。9/11の攻撃は、1989年、ソ連の崩壊時に封印が解かれたメッセージの確証であった。イスラム教による9/11の攻撃は、1840年8月11日に、イスラム教が抑制されるという預言が、一日が一年を表すというミラーの主要な預言解釈の規則を確認することによって第一の天使のメッセージに力を与えた出来事と並行していた。1840年8月11日は、一日を一年とする原則に基づいて予告されていた出来事の成就であった。それが成就したとき、第一の天使のメッセージは世界中のあらゆる宣教地に伝えられた。

9/11は、アドベンチズムに宣べ伝えるために与えられた「幻」の第一の原則を確認した。その原則とは、歴史は繰り返すということである。1840年8月11日に一日を一年とする原則が確証されたとき、黙示録10章の強い御使いが降りて来て、ミラーの「裁きの時」のメッセージが力を受けることを印づけた。こうして、9/11に黙示録18章の天使が降りて来た時を予型的に表した。

私がニューヨークは津波で一掃されると宣言したという話は一体どこから出てきたのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。私は、あそこで階を重ねて次々に建てられていく巨大な建物を見ながら、こう言いました。「主が立ち上がって地を激しく揺り動かされるとき、なんと恐ろしい光景が起こることだろう！ そのとき、黙示録18章1～3節の言葉が成就するだろう。」黙示録18章全体は、地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起こるかについて、私には特別な啓示はありません。ただ、いつの日か、そこにある巨大な建物が、神の力の揺り動かすと覆しによって打ち倒されることは知っています。私に与えられた啓示によって、私は、この世には破壊があることを知っています。主のひと言、御力のひとたびの触れによって、これらの巨大な構造物は倒れるのです。私たちには想像もできないほど恐ろしい光景が起こるでしょう。レビュー・アンド・ヘラルド、1906年7月5日。

イスラムについて語るべきことはもちろん他にも多くあるが、シェブナは、歴史の反復に基づき、かつその反復の根本的真理—すなわち物事の始まりがその終わりを示すという真理—を伴う預言的歴史の「ビジョン」を拒む者たちを代表している。1840年8月11日のイスラムの抑制は黙示録10章の天使を降臨させ、9/11のイスラムの解放は黙示録18章の天使を降臨させた。

私は言った。ヤコブの首長たち、イスラエルの家のつかさたちよ、どうか聞け。さばきを知るのはあなたがたの務めではないか。
善を憎み、悪を愛し、人々の皮をはぎ、骨からその肉をそぎ取る者たちよ。彼らはわが民の肉を食らい、皮をはぎ、骨を折り、鍋にかけるために、釜の中の肉のように、それを細かく切り刻む。そのとき彼らは主に叫ぶが、主は彼らに聞き入れない。そのとき、主は彼らに御顔を隠される。彼らの行いが悪かったからである。わが民を迷わせる預言者について、主はこう言われる。彼らは歯でかみ食らって「平和だ」と叫ぶが、その口に物を入れてくれない者に対しては、戦いを仕掛ける。それゆえ、お前たちには夜が来て幻は見られず、暗闇となって占うこともできない。預言者の上には日が沈み、彼らの上には昼も暗くなる。そのとき、先見者は恥じ、占い者はうろたえる。まことに皆が口を覆う。神からの答えがないからだ。しかし私は、主の霊による力と、公正と剛力とに満ち、ヤコブにその背き、イスラエルにその罪を告げる。どうかこれを聞け、さばきを憎み、すべての公正を曲げる、ヤコブの家の首長たち、イスラエルの家のつかさたちよ。彼らは血でシオンを築き、不義でエルサレムを建てる。その頭たちは賄賂のためにさばき、祭司たちは報酬のために教え、預言者たちは金のために占う。それでも彼らは主に寄り頼み、「主は我らのただ中におられるではないか。災いは我らに臨むまい」と言う。ミカ書 3章1-11節

アリエル [エルサレム] と戦うすべての国々の軍勢、すなわち彼女とその要塞に向かって戦い、彼女を苦しめる者はみな、夜の幻の夢のようになる。それは、飢えた人が夢を見て、見よ、食べているが、目が覚めるとその腹は空のままであるのに等しい。あるいは、渴いた人が夢を見て、見よ、飲んでいて、目が覚めると、見よ、彼は衰え、その魂はなお渴きを覚えるのに等しい。シオンの山と戦うすべての国々の軍勢も、そのようになる。立ち止まって、驚け、叫べ、また叫べ。彼らは酒によらずして酔い、強い酒によらずしてよるめく。主があなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉ざし、預言者、あなたがたの君たち、先見者を覆われたからである。そして、すべての幻はあなたがたには封印された書の言葉のようになった。人々がそれを学のある者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は、「読めない。封印されているからだ」と言う。さらに、その書を学のない者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は、「私は学がない」と言う。それゆえ主は言われる、「この民は口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れており、わたしに対する恐れは人間の戒めによって教え込まれたものだ。それゆえ、見よ、わたしはこの民の中で驚くべき業、まことに驚くべき不思議を行う。彼らの知者の知恵は滅び、思慮ある者の悟りは隠される。」 わざわいだ、主からその計りごとを深く隠し、その業を暗闇で行って、「だれがわれわれを見るのか、だれがわれわれを知るのか」と言う者たちに。まことに、あなたがたの転倒は陶器師の粘土のように見なされる。造られた物が、それを造った者について、「彼は私を造らなかった」と言うだろうか。形づくられた物が、それを形づくった者について、「彼には

悟りがない」と言うだろうか。イザヤ書 29:7-16.

イザヤによれば、「幻の谷」は「災いと踏みにじりと混乱の日であり、万軍の主なる神によって幻の谷で城壁は打ち壊され、叫びは山々にまで及ぶ日である」。それゆえイザヤは、イエスもそうされたように、激しく泣いた。

イエスの涙は、ご自身の苦しみを予期してのものではなかった。目の前にはゲツセマネがあり、まもなく大いなる暗闇の恐怖が彼を覆おうとしていた。視界には羊の門もあり、そこからは何世紀にもわたり、犠牲の供え物とする獣が導かれていった。この門はやがて、世界の罪のためにささげられる彼の犠牲を、これらすべての供え物が指し示してきた、その大いなる実体である方のために開かれようとしていた。近くには、彼の迫り来る苦悶の舞台となるカルバリの丘があった。だが、贖い主が涙を流し、霊の激しい苦悶にうめいたのは、彼の残酷な死を思い起こさせるこれらのもののためではなかった。彼の悲しみは自己中心的なものではなかった。ご自身の苦難の思いは、その高貴で自己犠牲的な魂をひるませることはなかった。イエスの心を刺し貫いたのはエルサレムの姿であった—神の御子を退け、その愛を侮り、その力ある奇跡によっても納得しようとせず、今や彼のいのちを奪おうとしているエルサレムの姿であった。彼は、贖い主を拒んだ罪のうちに彼女が何であるかを見、また、ただひとり彼女の傷を癒すことのできる方を受け入れていたなら、彼女がいかなる者となりえたかを見た。彼は彼女を救うために来られたのだ。どうして彼女を見捨てることができようか。

イスラエルは恵まれた民であった。神は彼らの神殿を御自らの住まいとされ、それは「その立てられたさまは美しく、全地の喜びであった」。詩篇48章2節。そこには、独り子を思う父のように、キリストが見守り配慮し、深い慈しみを注がれた千年以上に及ぶ記録があった。その神殿で、預言者たちは厳粛な警告を発してきた。そこでは、燃える香炉が振られ、礼拝者たちの祈りとともに香が神に立ちのぼった。そこでは、キリストの血を象徴する獣の血が流された。そこでは、贖罪所の上において、主はご栄光を現された。そこでは、祭司たちが務めを執り行い、しるしと儀式の荘厳な営みが幾世紀にもわたって続けられてきた。しかし、これらすべてにも終わりが来なければならなかった。

イエスは手を挙げ——その手は幾度となく病める者や苦しむ者を祝福してきた——滅びに定められた都の方へその手を振り、悲しみに満ちた途切れ途切れのことばで叫ばれた。「もしあなたも、少なくともこのあなたの日に、あなたの平和に関わることを知っていたなら——」ここで救い主は言葉を止め、神が与えようと望まれた助け——その愛する御子という賜物——を彼女が受け入れていたなら、エルサレムがどのような状態になっていたかについては語られなかった。もしエルサレムが、本来知るべきであったことを知り、天が彼女に送った光に従っていたなら、神から与えられた力によって自由で、繁栄の誇りをもって立ち、諸国の女王として君臨していたであろう。彼女の門には武装した兵士が立つこともなく、城壁にはローマの旗が翻ることもなかったであろう。彼女が贖い主を受け入れていたならエルサレムを祝福していたであろう栄光ある運命が、神の御子の前に立ち現れた。彼は、彼女がご自身を通して重い患いを癒やされ、束縛から解き放たれ、地上の力ある首都として確立されたであろうことを見た。彼女の城壁からは、平和の鳩がすべての国々へと飛び立っていったであろう。彼女は世界の栄光の冠となっていたであろう。

しかし、エルサレムがいかにあり得たかという輝かしい光景は、救い主の目から薄れていく。彼は、いま彼女がローマのくびきの下に置かれ、神の怒りを負い、その報復の裁きに定められている現実を悟る。彼は途切れていた嘆きの糸を再び手繰り寄せて、こう言われる。「しかし今は、それらはあなたの目から隠されている。やがてあなたの上に日が臨み、あなたの敵はあなたの周りに壘を築き、あなたを取り巻き、四方から封じ込め、そしてあなたとあなたの内にいる子どもたちを地に打ち倒し、あなたの中に石の上に石を一つも残さない。あなたが訪れの時を知らなかったからである。」

キリストは、エルサレムとその子らを救うために来られた。しかし、パリサイ的な高慢、偽善、嫉妬、そして悪意が、彼がその目的を成し遂げるのを妨げた。イエスは、滅びに定められたその都に下る恐るべき報いを知っておられた。彼は、軍勢に取り囲まれたエルサレム、包囲された住民が飢餓と死に追いやられ、母親が自分の子の亡骸を食べ、親も子も互いから最後のひとかけらの食べ物を奪い合い、飢えの噛むような痛みによって自然の情愛が打ち砕かれるのを見られた。彼はまた、ご自身の救いを拒んだことに示されるユダヤ人の頑なさが、侵攻してくる軍勢への服従をも拒ませることになるのを見通された。彼は、ご自身が上げられるはずのカルバリが、森の木のように十字架が林立しているのを見られた。哀れな住民が拷問台や十字架刑によって苦しみ、美しい宮殿は破壊され、神殿は廢墟となり、その巨大な城壁は一つの石も他の石の上に残らず、都は畑のように掘り返されるのを見られた。その恐ろしい光景を思えば、救い主が苦悶の涙を流されたのももっともである。

エルサレムは主の御配慮のうちに育まれてきた子であり、優しい父が道を踏み外した息子を嘆くように、イエスは愛するこの都のために涙を流された。「どうしてあなたを見捨てることができようか。どうしてあなたが滅びにささげられるのを見ていられようか。あなたの不義の杯を満たすために、あなたを手放さねばならないのか」。一つの魂はそれほど価値が高く、それに比べれば諸世界も取るに足らなくなる。しかしここでは、まるごと一つの国民が失われようとしていた。急速に西に傾く太陽が大空から姿を消すとき、エルサレムの恵みの時は終わるのだった。行列がオリブ山の頂で立ち止まっている間は、エルサレムが悔い改めるのにまだ遅くはなかった。憐れみの御使いはそのとき翼をたたみ、黄金の御座から降りて、義と速やかに来る裁きに座を譲ろうとしていた。しかし、キリストの大いなる愛の御心はなおも、御憐れみを侮り、御警告を軽んじ、今やその御血で自らの手を染めようとしているエルサレムのために執り成しておられた。もしエルサレムがただ悔い改めるなら、まだ遅くはなかった。沈む太陽の最後の光が神殿や塔や尖塔に名残をとどめている間に、どこかの善き御使いが彼女を救い主の愛へと導き、その滅びを免れさせはしないだろうか。美しくも不敬虔な都、預言者たちを石打ちにし、神の御子を退け、悔い改めないことで自らを束縛の鎖に閉じ込めていたその都—その憐れみの時はほとんど尽きていた。 Desire of Ages, 576-578.

イザヤ書二十二章に描かれているように、エルサレムに対する戦いでは、攻める者たちは「門で戦列を整える」。エラムとキルは武具を整えて門におり、そして彼らはエルサレムの覆いを見出す。イザヤ書において、敵が門で見出した「覆い」とはエジプトの影である。

ああ、背く子らはわざわいだ、と主は言われる。彼らは計りごとを企てるが、わたしによらず、覆いを重ねるが、わたしの霊によらない。こうして彼らは罪の上に罪を加える。彼らはエジプトに下るために出かけるが、わたしの口に尋ねず、ファラオの力によって自らを強め、エジプトの陰に頼ろうとするのだ！イザヤ書 30:1、2

エルサレムの敵は、シェブナに代表される者たちがエジプトに頼り、エジプトが自分たちを守ってくれると考えていることを認めている。これに対し、ヒルキヤの子エリヤキムに代表される者たちは、「エジプトの陰」に頼らず、神の霊の覆いで覆われ、「いと高き方の陰」に信頼している。

いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。私は主について言おう。「主は私の避け所、私の砦、私の神。私は主に信頼する」。詩篇 91:1、2。

日曜法の危機において、ヒルキヤの子エリヤキムに象徴される賢い乙女たちは、いと高き方の影に信頼しており、シェブナに象徴される愚かな乙女たちはエジプトの陰に信頼している。「discovered」と訳されている語は、裸にして捕囚として連れ去ることを意味する。城門にいる敵は、エルサレムの守りが取り去られたことを悟り、シェブナとその仲間たちは自分たちの身を救おうとし始める。彼らは「ダビデの町の破れ目」を目にし、敵の侵入を許す多くの破れ目があるのを認めるからである。十人の乙女のたとえに示されているように、慌てふためいて、愚かな者たちは避け所を求め始めるが、彼らにはそれがない。

シェブナは自分を救うために「森の武具」に頼るが、もう遅かった。彼はエルサレムの家々を数え、城壁を強化するためにそれらを取り壊し始めるが、もう遅かった。彼らは下の池の水を集め、古い池の水と結びつけようとするが、もう遅かった。水が聖霊の主要な象徴であることは、彼ら在必死に油を求めていることを示しているが、もう遅かった。あらゆる努力の中で彼らは池の創造主、そして彼がその真理の「池」を遠い昔に造られたことを忘れていた。昔にそのメッセージを与えたのは永遠の岩であったことを彼らは忘れていた。彼らは、ウィリアム・ミラーの働きを通して築かれた土台によって表される古い道を歩まないことを選んだ。

敵は、この終わりの時に立つ民を備える働きから、私たちの兄弟姉妹の心をそらそうとしている。彼の詭弁は、この時の危険と務めから人々の心を遠ざけるように仕組まれている。彼らは、キリストが天から来て、ヨハネにご自分の民のために与えられた光を、取るに足らないものと見なしている。彼らは、私たちの目の前に迫る出来事は特別な注意を払うほど重要ではないと教える。彼らは天来の真理を無効にし、神の民からこれまでの経験を奪い、その代わりに偽りの科学を与えている。

「主はこう言われる。道に立って見よ、昔からの道を尋ね、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。」エレミヤ書6章16節

誰も、私たちの信仰の土台——私たちの働きの初めに、御言葉を祈り深く学び、啓示によって据えられた土台——を引きはがそうとしてはならない。私たちはこの土台の上に、この五十年の間、築き上げてきた。人は、新しい道を見だし、すでに据えられているものよりも強固な土台を据えることができると考えるかもしれない。しかし、これは大いなる欺瞞である。すでに据えられているもの以外の土台を、人は据える

ことができない。

過去に多くの人々が、新しい信仰の構築や新しい原理の確立に着手してきた。だが、彼らの築いたものはどれほど長く持ちこたえただろうか。ほどなく倒れた。岩の上に据えられていなかったからである。

初代の弟子たちも、人々の言葉に直面しなければならなかったではないか。彼らは偽りの理論に耳を傾け、そのうえで、すべてを成し終えて、こう言って堅く立たなければならなかったのではないか。「人はだれも、すでに据えられているもの以外の土台を据えることはできない」。第一コリント 3:11

「それゆえ、私たちは最初の確信を終わりまで堅く保たなければならない。力ある言葉が、神とキリストによってこの民に送られ、彼らを世から、一つひとつの点で、現在の真理の澄んだ光の中へと導き出してきた。聖なる火に触れられた唇をもって、神のしもべたちはそのメッセージを宣べ伝えてきた。神の御告げは、宣べ伝えられた真理の真正さにその印を押してきた。」『Testimonies』第8巻、296、297頁。

これらすべてが起こるその「日」は、イザヤが、万軍の主なる神が『泣き悲しみ、嘆き、頭を剃り、粗布を腰に締めること』を求められた日だと述べる、聖書の「日」である。

主はモーセに言われた。「また、この第七の月の十日には、贖罪の日がある。それはあなたがたにとって聖なる集会となり、あなたがたは自らを苦しめ、主に火によるささげ物をささげなければならない。その同じ日にはいかなる仕事もしてはならない。これは、あなたがたの神、主の御前で、あなたがたのために贖いをする贖罪の日だからである。もしその同じ日に自らを苦しめない者があるなら、その者はその民のうちから断たれる。また、その同じ日にいかなる仕事をする者があるなら、その者を、わたしはその民のうちから滅ぼす。あなたがたはいかなる仕事もしてはならない。これは、あなたがたの代々にわたり、あなたがたのすべての住まいにおいて、永遠の定めとなる。それはあなたがたにとって全き休みの安息日となり、あなたがたは自らを苦しめなければならない。その月の九日の夕べに、夕べから夕べに至るまで、あなたがたは自分の安息日を守らなければならない。」レビ記 23:26-32

「ヒルキヤの子エリヤキムとシェブナによって示されている日」は、反型の贖罪日であり、1844年からミカエルが立ち上がる時までの歴史を包含している。その期間においてアドベンチズムは自らの魂を「苦しめる」ように召されており、イザヤの表現によれば、それは「泣き悲しみ、嘆き、髪をそり、荒布を腰に締めること」への召しである。

1844年に、私たちの偉大な大祭司は天の聖所の至聖所に入れ、調査審判の働きを開始された。義なる死者たちの案件は神の御前で次々と審査されてきた。その働きが完了するとき、生者に対する裁きが下される。なんと尊く、なんと重要な、これらの厳粛な時であることか。私たち一人ひとりには、天の法廷に係属中の案件がある。私たちはそれぞれ、身体をもって行った行いに応じて裁かれる。型の奉仕において、地上の聖所の至聖所で大祭司が贖いの務めを行ったときには、人々は神の御前で自分の魂を悩まし、罪を告白することを求められ、それによって彼らの罪が贖われ、ぬぐい去られるためであった。では、天の聖所においてキリストがご自分の民のためにとりなしておられ、すべての案件に対して最終的で取り消し得ない決定が宣告されようとしているこの反型の贖罪日に、私たちにそれより少ないことが求められることがあるだろう

か。

この恐ろしく厳肅な時における私たちの状態はどうであろうか。ああ、教会にはなんと高慢がはびこり、なんと偽善、なんと欺き、なんと着飾ることへの愛着、なんと軽薄さと娯楽、なんと優位に立とうとする欲望があることか！これらすべての罪が心を曇らせ、永遠の事柄が見分けられなくなっている。私たちは聖書を調べ、この世の歴史の中で自分たちがどこにいるのかを知ろうとしないでよいのか。今この時になされている私たちのための御業、そしてこの贖いの業が進められている間、罪人である私たちが占めるべき立場について、理解ある者とならないでよいのか。もし魂の救いを少しでも顧みるなら、私たちはきっぱりと変わらなければならない。真実の悔い改めをもって主を求め、魂の深い痛悔をもって自分の罪を告白し、それらがぬぐい去られるようにしなければならない。『セレクトッド・メッセージ』第1巻、124、125頁。

その日、万軍の主なる神は、泣き悲しみ、嘆き、頭を剃り、荒布を腰に締めることを求められた。ところが、見よ、喜びと楽しみ、牛を屠り、羊を殺し、肉を食べ、ぶどう酒を飲み、「食べて飲もう。明日は死ぬのだから」。イザヤ書 22:12、13

主はシェブナに自分の魂を苦しめるよう命じたが、彼は食べて飲んで浮かれ続けることを選んだ。主は、シェブナの罪が清められないことを、彼の「耳に」「明らかにした」。 「清められる」と訳されている語は、レビ記で「贖い」に用いられている語である。このラオディキア的アドベンチズムの罪は贖われない。さてイザヤは、シェブナ（ラオディキア的アドベンチスト）と、ヒルキヤの子エリヤキム（フィラデルフィア的アドベンチスト）との関係について語り始める。

シェブナは、ユダがそうであったように、「会計役」である。ネヘミヤの時代、トビヤは、供え物を納めておくはずの部屋（宝物庫）のある神殿の一室に住んでいた。ネヘミヤが神殿を清めたとき、彼はトビヤとその持ち物を放り出した。シェブナもまた追い出されることになる。どちらも、「日曜法」においてラオディキア的アドベンチズムが吐き出されることを象徴している。

アンモン人とモアブ人がイスラエルに対して示した残酷さと裏切りのゆえに、神はモーセを通して、彼らは永遠に神の民の会衆から締め出されるべきだと宣言しておられた。申命記23章3-6節参照。この御言葉に逆らって、大祭司は神の家の一室に保管されていた供え物を取り除き、この禁じられた民族の代表者のために場所を設けた。神とその真理の敵にこのような恩恵を与えることほど、神に対する大きな侮辱はありえなかった。

ペルシアから戻ったネヘミヤは、その大胆な冒瀆を知り、侵入者を追い出すために迅速な措置を講じた。「私は大いに心を痛めた」と彼は言う。「それで私は、トビヤの家財道具をその部屋からすべて投げ出した。次いで私は命じ、彼らは諸室を清めた。そして私は、神の宮の器と、穀物のささげ物と乳香を、再びそこへ運び入れた。」

神殿は汚されただけでなく、ささげ物も誤って用いられていた。それが人々の惜しめない施しの心をくじく結果となった。彼らは熱心と情熱を失い、十分の一を納めることを怠った。主の家の宝物倉は十分に満たされず、神殿の奉仕に携わっていた多くの歌い手やそのほかの者たちは、十分な支えを受けられなかったため、神のわざを離れ

て他所で働くようになっていた。『預言者と王たち』 670.

シェブナ、ユダ、トビヤは皆、時の終わりにおけるラオデキアのアドベンチストを象徴している。

万軍の主なる神はこう言われる。「行け。宮廷を預かるこの財務官シェブナのもとに行って、言え。『ここに何があるのか。ここに誰がいるというのか。おまえが、あたかも高い所に自分のための墓を切り出し、岩に自分の住まいを彫り込む者のように、ここに自分のための墓を切り出すとは。見よ、主はおまえを力づくで捕囚として運び去り、必ずおまえを包み込まれる。主は必ずおまえを激しくひねり回し、広い国へと球のように投げ飛ばされる。そこできつとおまえは死に、そこでおまえの栄光の戦車は、おまえの主君の家の恥となる。わたしはおまえをその持ち場から追い払い、彼はおまえをその地位から引きずり降ろす。』」イザヤ書 22:15-19.

北の王がエルサレムに迫りつつあり、その接近は段階的なもので、エルサレムの市民はそれがやって来ることを知っていた、ということ覚えておかなければならない。これは、アッシリアの司令官タルタンがエジプトのアシュドドを征服したときのこと記されているイザヤ書二十章に示されている。彼らは何が起こるかを知っており、シェブナは自分のための立派な墓づくりに時間を費やした。考古学者たちはシェブナの墓を発見し、墓の入口にあった銘文を取り外したが、それは現在、大英博物館にある。驚くべきことに、シェブナが解任され、ヒルキヤの子エリヤキムがシェブナの指導的地位を引き継いだとき、ヒルキヤの子エリヤキムは公文書に自らの名を押印するために用いることのできる王の印章を受け取った。その印章もまた考古学者によって発見され、イングランドの同じ博物館に所蔵されている。博物館には、死のしるしである墓によって示されるシェブナと、命のしるしである印章によって示されるヒルキヤの子エリヤキムがいる。

北の王に関する警告のメッセージをシェブナが退けたため、彼は主の口から吐き出された。また、黙示録のラオデキヤへの警告で「吐き出す」と訳されている語は、実際には嘔吐するような嘔吐を意味する。ネヘミヤのときにはトビヤとその持ち物が追い出され、シェブナに関しては、彼は球のように遠い国に激しく投げ飛ばされた。シェブナは、1989年に封印が解かれた預言のメッセージを退け、墓場、すなわち獣の刻印への備えをしているラオデキヤ的アドベンチストを指し、ヒルキヤの子エリヤキムは、神の印を受けるフィラデルフィア的アドベンチズムを指す。

その日には、わたしはわたしのしもべ、ヒルキヤの子エリヤキムを召し出す。わたしは彼にあなたの衣を着せ、あなたの帯を彼に締めさせ、あなたの職務を彼の手にもたせぬ。彼はエルサレムの住民とユダの家にとって父となる。イザヤ書 22:20、21.

日曜法の時、アドベンチズムの麦と毒麦が分けられ、勝利の教会の指導権はヒルキヤの子エリヤキムに与えられる。そして主は、第三天使の使命が大いなる叫びへと膨れ上がる中、ご自身の教会を旗印として高く掲げられる。単にエリヤキムと言えよの、「ヒルキヤの子」という語句を付け加えることで、私はおそらく冗長になりすぎている。しかし、父と子を並べることで、最後の七つの災いに先立つエリヤのメッセージの象徴である。エリヤのメッセージは、父と子という象徴を用いて、初め（父）と終わり（子）を表す。この預言的關係は、第二十二章の最後の謎に寄与している。ヒルキヤの子エリヤ

キムへの約束は、主が彼の肩にダビデの家の鍵を置かれるということである。

「ダビデの家」とは、反抗的なユダヤ人たちとの最後の対話の中でイエスが言及した、父と子についてのメッセージである。また、そこは彼が『ヨハネの黙示録』を締めくくるところでもある。ダビデの家には鍵があったが、他に何も用いられないとしても、それは1844年10月22日に用いられる。というのも、この鍵に言及している聖書の唯一の箇所は、フィラデルフィアの教会へのメッセージの中にあるからである。

また、わたしはダビデの家の鍵を彼の肩に置く。彼が開ければ、閉める者はなく、彼が閉めれば、開ける者はいない。イザヤ書 22:22。

フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。聖なる方、真実なる方、ダビデの鍵を持ち、開けば誰も閉じることができず、閉じれば誰も開くことができない方がこう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。誰もそれを閉じることにはできない。あなたは力がわずかでありながら、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。見よ、サタンの会堂に属し、自分たちはユダヤ人だと言いながら実はそうではなく、偽っている者たちを、見よ、わたしは彼らを来させ、あなたの足もとにひれ伏させ、わたしがあなたを愛したことを知らせる。あなたがわたしの忍耐の言葉を守ったから、わたしもまた、地上に住む者たちを試すために全世界に臨もうとしている試練の時から、あなたを守る。見よ、わたしはすぐに来る。あなたの持っているものを堅く保て。誰にもあなたの冠を奪われないように。勝利を得る者を、わたしの神の宮の柱とし、彼はもはや外に出ることがない。わたしは彼の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都の名、すなわち天から、わたしの神のもとから下って来る新しいエルサレムの名を書き記し、またわたしの新しい名を書き記す。耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。ヨハネの黙示録 3:7-12。

エリヤキムは、1844年10月22日に至聖所を開くミラー派運動の時期におけるフィラデルフィア人を表している。私は、その経綸的な扉を開いたのは私たちの大祭司であるキリストであったことを知っているが、キリストはヒルキヤの子エリヤキムの肩に鍵を置き、「彼が開く」と述べている。私たちは、この記事の冒頭で私が指摘した点に到達した。

イザヤ書では「burden」という語が18回見られるが、そのうち7回は肩に担うものを表し、11回は破滅の預言を指す。これら18回のうちの1回では、破滅の預言を意味するその語が、同時に肩に担う重荷を表すものとしても用いられている。

「幻の谷」の物語は、エルサレムの礼拝者を二つのグループに分ける滅びのメッセージについてのものである。審判の開始を示したその預言的メッセージはミラー師によって宣べ伝えられ、それは第一の天使のメッセージであり、1844年10月22日に聖所の扉が閉ざされ、至聖所が開かれたときに終わった。ウィリアム・ミラーの肩に負わされ、世界へ運ぶことを託されたその「重荷」は第一の天使のメッセージであり、第三の天使のメッセージの到来とともに1844年10月22日に終わった滅びの予言であった。

「『ダビデの家の鍵を彼の肩に置く』とあり、また『その日には』『確かな所に打ち付けられた釘は抜かれ、切り落とされ、落ち、その上にあった重荷は断ち切られる』とある。」

ここで「重荷」と訳されている語は、災いの預言を指す語である。しかし、この災いの預言という語は、肩に担ぐものを表すときにイザヤが用いるヘブライ語ではない。災いの預言を意味する語として読むと、ヒルキヤの子エリヤキムの肩にダビデの鍵が置かれ、彼の肩にある重荷は災いの預言である、ということになる。これは実に深い言葉遊びだ！

シスター・ホワイトは、聖書に付いている鍵についてこう言っています。

神の御言葉には、それに伴って尊い宝箱を開ける鍵がある。開かれると私たちは満足し、喜ぶ。私は与えられる一筋一筋の光に感謝している。将来、今の私たちには非常に神秘的に思われる経験は解き明かされるだろう。いくつかの経験については、この死ぬべき身が不死を着るまで、私たちは決して完全に理解することはできないかもしれない。原稿集 第17巻 261頁

ミラーの夢についての冒頭の発言はこう述べている。

「私は夢を見た。神が目に見えぬ御手によって、長さ約十インチで一辺六インチの正方形の、黒檀製で真珠の精巧な象嵌が施された、不思議なほど精緻に作られた小箱を私に送ってくださったのだ。その小箱には鍵が付いていた。私はすぐにその鍵を取り、小箱を開けた。すると驚いたことに、中にはあらゆる種類と大きさの宝石、ダイヤモンド、貴石、そしてあらゆる大きさと価値の金貨や銀貨が詰まっており、小箱のそれぞれの場所に美しく整えられていた。そしてそのように並べられて、それらは太陽にのみ匹敵するほどの光と栄光を反射していた。」『初期の著作』81。

ジェームズ・ホワイトがその夢に付した脚注の中で、彼は鍵についてこう述べている。

「鍵付き」とは、預言の御言葉を解釈する彼の方法—聖句を聖句と照らし合わせ、聖書は自らを解釈する—のことであった。この鍵によってミラー兄弟は「宝石箱」、すなわち再臨の大真理を世に明らかにした。ジェームズ・ホワイト

ジェームズ・ホワイトはこの夢にコメントし、その際に序文を書いた。最も重要なのは、ミラーがこの夢を見て1847年に公表したという点であり、それは「大失望」の少なくとも2年後で、かつて一つに結束していたミラー派アドベンチストたちが離散していた時期だった。ミラーは運動から離れており、「四方に散らされた」とされた「小さな群れ」は依然としてその失望に苦しんでいた。ミラーの夢はその状況に語りかけるものであり、ジェームズ・ホワイトはそれについて論評し、エレン・ホワイトもこれを全面的に肯定的な姿勢で言及した。ジェームズ・ホワイトはその夢に序文を書き、夢そのものを収録し、さらにいくつか脚注を付した。これらの情報を必要とする人のために、彼の序文、夢、そして脚注は本稿の末尾に掲載される。

イザヤ書二十二章は、アドベンチズムの始まりと終わりの一つの例証である。両方の歴史において、1844年10月22日に分離が生じ、日曜法の時にも再び生じることになる。始まりと終わりという両方の場面におけるこの分離は、十人の乙女のたとえの成就である。ホワイト夫人は、愚かな乙女たちはラオデキア人であると教えている。シェブナは、アドベンチズムの始まりと終わりにおけるラオデキアのアドベンチストを表している。ヒルキヤの子エリヤキムは、フィラデルフィアのアドベンチストを表している。

しかし、ヒルキヤは、「彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる」とあるように、アドベンチズムの父をも象徴している。ウィリアム・ミラーは敬意を込めて「ファーザー・ミラー」と呼ばれた。ミラーの肩に「ダビデの鍵」が置かれたことは、彼の聖書研究の方法、すなわち「行に行を重ねる」ことを表している。

その箱は聖書を指しており、彼は第一の天使の真理を開くために用いた預言解釈の規則を表す「ダビデの鍵」を用いた。これらの規則（ダビデの鍵）と、ダビデの鍵によって理解された彼の破滅の預言（重荷）は、聖所にある「確かな所の釘」に掛けられた。その「釘」とは1844年10月22日という日付であった。「釘」という語はピン、釘、あるいは杭を意味し、道しるべを表している。その「重荷」、すなわちその釘に掛けられた破滅の預言は第一の天使のメッセージであり、そのメッセージは、破滅の預言が成就して取り外され、切り落とされ、落ちた1844年10月22日に終結した。破滅の預言のメッセージが過去のものとなったためにそれは取り外され、その後その釘は至聖所へ移され、そこで別の破滅の重荷がその釘に掛けられることになった。

「ダビデの鍵」として表された預言の規則によって理解されたミラーの滅びの預言は、父の家のすべての栄光を支える一本の釘を聖所に打ち込むことになるだろう。この箇所の「栄光」という語は、重みを意味する。家の重みを支えるのは、その家の土台である。ミラーの土台となる働きは、「子孫と末裔」によって表される第三天使のメッセージのあらゆるさらなる光の重みを支えている。また、神殿のさまざまな器のすべての重みも支えている。そして、栄光の御座を据える神殿のための土台が据えられた。

ヒルキヤの子エルヤキムは、フィラデルフィアの教会を象徴している。エルヤキムは「起こす神」を意味する。というのも、「エルサレムの父」エルヤキムは、神が用いて神に選ばれた契約の民の土台を立て上げたウィリアム・ミラーを表しているからである。彼はヒルキヤの子であり、この名は二つの語に由来し、後者は「神」、前者は（話しぶりの）「なめらかさ」を意味する。ヒルキヤは神の御言葉、あるいは御声を表し、その子は神殿を建て起こすことを表している。

アドベンチズムの終わりには破滅の預言がなければならず、その預言こそが黙示録14章の第三の天使である。終わりには、ミラーの鍵によって予型された鍵がなければならない。今日の「鍵」は歴史の繰り返し、ことに初出の法則に基づいており、それはアルファでありオメガであるキリストご自身によって表される原則を含み、あるいはそのものでもある。ミラーの子がいなければならない。ゆえに父としてのミラーは「主の言葉」のヒルキヤとなり、ミラーの子はエリヤキム、すなわち「起こす神」を意味する。父ミラーは神殿を建て起こし、ミラーの子は、ラオデキアとフィラデルフィアが分離し、フィラデルフィアの者たちが旗印として掲げられる時を明らかにする。打ち付けられた釘がなければならないが、それはミラーの歴史のときのように聖所ではなく、至聖所にある。第一の天使のメッセージの終わりにそうであったように、その釘とそれに掛けられた重荷は、第三の天使のメッセージの終わりに断ち切られる。ミカエルが立ち上がり、人類の恩恵期間が閉じるとき、破滅の預言は過去のものとなり、取り除かれ、断ち切られ、倒れる。

1844年に時の期限が過ぎた後に起きた分離または離散は、日曜法の時に再び起こる。イザヤ書二十二章は、日曜法の危機において起こる、ラオデキヤ派アドベンチストがフィラ

デルフィア派アドベンチストから分離するに至る状況の例証である。

そして、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。「アーメンである方、忠実で真実な証人、神の創造の初めである方が、こう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくも熱くもない。むしろ冷たいか熱いかであってほしい。だから、あなたがなまぬるく、冷たくも熱くもないので、わたしはあなたをわたしの口から吐き出そう。あなたは『私は富んでおり、豊かになって、何一つ不足はない』と言うが、自分がみじめで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。わたしはあなたに忠告する。富むようになるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。また、白い衣を買って身に着け、あなたの裸の恥が現れないようにしなさい。さらに、見えるようになるために、目に塗る薬を買って目に塗りなさい。わたしが愛する者を、わたしは叱り、懲らしめる。だから、熱心になって悔い改めなさい。見よ、わたしは戸のところに立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入り、彼と共に食事をし、彼もわたしと共に食事をする。勝利を得る者には、わたしの座にわたしと共に座することを許そう。わたし自身も勝利を得て、わたしの父と共にその座に着いたのと同じである。耳のある者は、御霊が諸教会に語ることを聞きなさい。」ヨハネの黙示録 3:7-22.

ジェームズ・ホワイトは、夢の紹介の後に、脚注付きでその夢を収録している。私には、ジェームズ・ホワイトによるミラーの夢の適用に何の問題もない。私たちはジェームズ・ホワイトのものとはやや異なるその夢の解釈をしばしば公表してきたにもかかわらずである。私たちが公表してきたものと異なるジェームズ・ホワイトの基本的な見方は、彼が「宝石」を神の民の文脈に置くのに対し、私たちはその宝石を預言的真理と理解している、という点である。人は自分の信じるものを反映するものだから、そこに矛盾はない。また、大失望の後に宝石が散らされたことは、日曜法に先立つ時期における神の民の離散を象徴している。しかし、この点については将来の研究に委ねる。

ジェームズ・ホワイトによる『ウィリアム・ミラーの夢』の序文

次の夢は二年以上前に Advent Herald に掲載された。その時私は、それが私たちの過去の再臨の経験を明確に示しており、散らされた群れの益のために神がその夢を与えられたのだと悟った。

主の大きいなる恐るべき日が間近に迫っていることを示すしるしの中に、神は夢を備えておられる。ヨエル書2:28-31、使徒行伝2:17-20参照。夢は三つの仕方である。第一に、「多くの仕事によって」。伝道者の書5:3参照。第二に、汚れた霊とサタンの欺きのもとにある者は、その影響によって夢を見ることがある。申命記8:1-5、エレミヤ書23:25-28、27:9、29:8、ゼカリヤ書10:2、ユダの手紙8節参照。そして第三に、神は昔から、また今も、天使と聖霊の働きを通して来る夢によって、多かれ少なかれご自分の民を教えておられる。真理の明るい光の中に立つ者は、神が自分に夢をお与えになるとき、それと分かる。そのような者は偽りの夢に欺かれ、迷わされることはない。

彼は言った。「今、わたしの言葉を聞け。あなたがたのうちに預言者がいるなら、わたし、主は幻のうちに彼に自らを知らしめ、夢のうちに彼に語る。」民数記 12:5.

ヤコブは言った。「主の使いが夢の中で私に語りかけた。」創世記31章2節。
「そして神は、夜、夢の中でシリア人ラバンのもとに来られた。」創世記31章24節。
創世記37章5-9節にあるヨセフの夢を読み、それがエジプトで成就する興味深い物語を続けて読みなさい。

ギブオンで、主は夜、夢の中でソロモンに現れた。列王記上3章5節。ダニエル書2章の非常に重要な像は夢で与えられ、7章の四つの獣なども同様である。ヘロデが幼子の救い主を滅ぼそうとしたとき、ヨセフは夢でエジプトへ逃げるように警告を受けた。マタイ2章13節。

そして、終わりの日には、と神は言われる。わたしはわたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子と娘は預言し、あなたがたの若者たちは幻を見、あなたがたの老人たちは夢を見る。使徒行伝 2:17

夢と幻による預言の賜物は、ここでは聖霊の実であり、終わりの日には、しるしとなるに足るほどに現されるであろう。それは福音の教会に与えられた賜物の一つである。

そして、彼は、ある者を使徒として、ある者を預言者として、ある者を伝道者として、またある者を牧師および教師として与えた。これは、聖徒たちを整えるため、奉仕の働きのため、キリストのからだを建て上げるためである。エペソ人への手紙 4:11、12。

そして神は教会に、第一に使徒、第二に預言者、などを立てられた。コリント人への第一の手紙 7:28。

預言を軽んじてはならない。テサロニケ人への手紙第一 5:20。なお、使徒行伝 13:1、21:9、ローマ人への手紙 12:6、コリント人への手紙第一 14:1、24、39も参照。預言者、または預言は、キリストの教会を建て上げるためのものであり、伝道者、牧者および教師がやむより先にそれらがやむべきだと、神の御言葉から証明できる根拠は何一つない。しかし反対者は言う。「偽りの幻や夢があまりにも多かったので、その類のものは何ひとつ信頼できない。」確かにサタンにはその偽物がある。彼はいつも偽預言者を持っていたし、欺きと勝利のこの彼の最後の時にあって、今なお彼らが現れることを私たちは当然予期してよい。偽物が存在するからといってそのような特別な啓示を退ける者は、同じ理屈でさらに一歩進めて、神が夢や幻によって人にご自身を現されたことはかつて一度もないと否定してもよい、ということになる。なぜなら、偽物はいつの時代にも存在してきたからである。

夢と幻は、神がご自身を人に啓示してこられた手段である。この手段によって神は預言者たちに語られ、福音の教会における諸賜物の中に預言の賜物を据えられ、さらに、夢と幻を『終わりの日々』のほかのしるしと同列に位置づけておられる。アーメン。

以上の論述における私の目的は、聖書的な方法で異議を取り除き、以下の内容に備えて読者の心を整えることであった。

ジェームズ・ホワイト『ブラザー・ミラーの夢』1-3頁。

ウィリアム・ミラーの第二の夢

私は夢を見た。神が、見えない御手によって、黒檀製で真珠が巧みに象嵌された、長さは約十インチ、六インチ四方の精巧な小箱を私に送ってくださった。小箱には鍵が付けられていた。私はすぐにその鍵を取り、小箱を開けた。すると驚いたことに、あらゆる種類と大きさの宝石、ダイヤモンド、貴石、そしてあらゆる大きさと価値の金貨や銀貨が、小箱のそれぞれの場所に美しく並べられて、いっぱい詰まっていた。こうして並べられたそれらは、太陽にのみ比肩し得るほどの光と栄光を放っていた。

その中身の輝きと美しさ、そして価値に心は喜びで満たされたが、この素晴らしい光景を自分ひとりで楽しむわけにはいかないと思った。そこで私はそれを部屋の中央のテーブルに置き、望む者は誰でも来て、この世で人が見たうちで最も壮麗にして輝かしい光景を見られるよう知らせた。

人々が入って来はじめた。最初はわずかだったが、やがて群衆にふくらんだ。彼らが最初に宝石箱の中を覗き込むと、皆、感嘆し、歓喜の声を上げた。だが見物人が増えるにつれ、誰もが宝石をいじりはじめ、宝石箱から取り出しては机の上に散らかした。私は、持ち主がまた私に宝石箱と宝石の返還を求めてくるに違いない、と考えはじめた。もしそれらを散らかされるままにしていれば、以前のように宝石箱の中の元の場所に戻すことは二度とできないだろうし、その責任は計り知れず、とても果たせないと感じた。そこで私は、人々に、触らないでくれ、宝石箱から取り出さないでくれと懇願しはじめた。だが私が懇願すればするほど、彼らはますます散らかし、今や部屋じゅう、床や部屋のあらゆる家具の上にまでばらまいている有様だった。

そのとき私は、彼らが本物の宝石や貨幣の中に、無数の偽物の宝石と偽造貨幣を紛れ込ませてばらまいているのを見た。私は彼らの卑劣な振る舞いと恩知らずぶりにひどく憤慨し、そのことを戒めて非難した。だが、私が戒めれば戒めるほど、彼らは本物の中に偽物の宝石と偽造貨幣をますますばらまいた。

そこで私は肉体の魂にかき乱され、腕力に訴えて彼らを部屋の外へ押し出し始めた。だが一人を押し出しているそばから、さらに三人が入ってきて、土や削りくずや砂や、あらゆる種類のがらくたを持ち込み、本物の宝石やダイヤモンドや硬貨を残らず覆い隠し、すべてが見えなくなるまで続いた。彼らはまた私の小箱を引き裂いて粉々にし、その破片をがらくたの中にまき散らした。私の悲しみや怒りを顧みる者は誰もいないのだと思った。私はすっかり氣力を失い、落胆して、腰を下ろして泣いた。

このように大きな喪失と自らの責任の重さを思って泣き嘆いていると、私は神を思い起こし、助けを送ってくださるよう切に祈った。するとすぐに戸が開き、一人の男が部屋に入ってくると、そこにいた人々は皆出て行った。彼は手にほうきを持ち、窓を開け、部屋から塵やごみを掃き出し始めた。

彼にやめてくれと叫んだ。というのも、がらくたの中に貴重な宝石がいくつか散らばっていたからだ。

彼は私に「恐れるな。私が彼らの世話をするから」と言った。

すると、彼が塵やごみ、偽物の宝石や贗金を掃き払っているうちに、それらは皆、雲のように舞い上がって窓から外へ出ていき、風に運ばれていった。その騒ぎのさなか、私はほんの一瞬目を閉じた。目を開けると、ごみはすっかりなくなっていた。貴重な

宝石やダイヤモンド、金貨や銀貨が、部屋じゅうに溢れるほど散らばっていた。

彼はそれから、前のものよりはるかに大きくていっそう美しい小箱をテーブルの上に置き、宝石、ダイヤモンド、硬貨を一握りずつかき集めてはその小箱に投げ入れ、いくつものダイヤは針の先ほどの大きさしかなかったにもかかわらず、一つも残らなくなるまで続けた。

そして彼は私に「来て見なさい」と呼びかけた。

「私は小箱の中をのぞき込んだが、その光景のまばゆさに目がくらんだ。それらは以前の栄光の十倍もの輝きを放っていた。私は、それらは、あの邪悪な者たちが塵の中に撒き散らし踏みにじったとき、その足によって砂で擦り減らされてしまったのだと思っていた。小箱の中には整然と美しく並べられ、一つ一つがそれぞれの場所にあり、そこへそれらを投げ入れた男による目に見える損傷もなかった。私は喜びのあまり叫び声を上げ、その叫びで目が覚めた。」 Early Writings, 81-83.

ジェームズ・ホワイトの脚注

「casket」は、私たちの主イエス・キリストの再臨に関する聖書の偉大な真理を象徴しており、それらは世界に公表するようミラー兄弟に与えられたものである。

『添えられた鍵』とは、預言の言葉を解釈する彼の方法、すなわち聖句を聖句と比較し、聖書自体を解釈者とするということであった。この鍵によってミラー兄弟は『小箱』、すなわち来臨の大いなる真理を世に開いた。

「人々が入って来始め、はじめは人数も少なかったが、やがて群衆となるまで増えていった。」再臨の教義がミラー兄弟とごくわずかな他の者たちによって最初に説かれたとき、それはほとんど効果がなく、それによって目を覚ました者もごくわずかであった。しかし1840年から1844年にかけては、それがどこで説かれても、地域社会全体が奮い立った。

宝石箱の各所に美しく配された「さまざまな種類と大きさの」「宝石やダイヤモンド等」は、あらゆる教会から、また人生のほとんどすべての身分や境遇から出て来て再臨の信仰を受け入れ、真理の聖なる大義のためにそれぞれの持ち場で大胆に立ったと見られた、神の子ら [マラキ3:17] を表している。彼らがこの秩序のうちを進み、それぞれ自分の務めに当たり、神の御前にへりくだって歩んでいたとき、彼らは世界に「光と栄光を反射した」。それは使徒たちの時代の教会にのみ匹敵するものであった。メッセージ [黙示録14:6, 7] は、あたかも風の翼に乗って行き渡り、また「さあ、すべての用意が今や整っています」 [ルカ14:17] という招きは、力と効果をもって広まっていった。

飛ぶ御使い [黙示録14:6, 7.] が「神を恐れ、彼に栄光を帰せよ。彼のさばきの時が来たからである」という永遠の福音を初めて宣べ伝え始めたとき、イエスの来臨と回復を見込んで多くの者が喜びの叫びを上げたが、その者たちは後になって反対し、嘲り、つい先ほどまで彼らを喜びで満たしていた真理をあざけた。彼らは宝石をかき乱し、散らした。こうして、散らしの時期が始まった1844年の秋に至る。よく覚えておきなさい。宝石をかき乱し散らしたのは、かつて「喜びの叫びを上げた」者たちだっ

ただ、そして1844年以来、群れをこれほど効果的に散らし、迷わせた者は、かつて真理を宣べ伝え、それを喜んだが、その後、神のみわざと、私たちの過去の再臨経験における預言の成就を否定した者たちほどはいない。

Miller兄弟の証言は、1844年の第七の月の真夜中の叫びの後、数か月の間、「戸は閉じられた」ということ、再臨運動は予言の成就であり、私たちは時を説いたことにおいて正しかったということだった。彼はその後、Advent Heraldを通して兄弟たちに、固く保ち、忍耐し、互いに恨みを抱かないようにと勧め、また、神はまもなく、時を説いたことのゆえに彼らを正しいと認めてくださるだろうと述べた。このようにして彼は宝石のために嘆願し、同時に、それに対する自らの「責任」を感じ、しかもそれは「莫大なものになる」と感じていた。

本物の中に散らされていた「偽の宝石と偽造貨幣」は、1844年に戸が閉ざされて以来、明らかに偽の回心者、すなわち「異なる子ら」[ホセア 5:7.]を表している。

散らされていた「宝石」「ダイヤモンド」「コイン」が集められた、第二の『前のものよりはるかに大きく、より美しい小箱』は、散らされた群れが集められる、生ける現在の真理の広大な領域を表している。すなわち、生ける神の印を皆が持つ14万4千人である。尊いダイヤモンドの一つも暗やみに取り残されることはない。中には「針の先ほどの大きさしかない」ものもあるが、神がご自分の宝を集めておられるこの日に、見落とされて置き去りにされることはない。[Malachi 3:16-18.] 神は、ソドムからロトを出されたときのように、御使いたちを遣わして彼らを急ぎ出させることができになる。「主は地上で御業を短くされる。」「主は義においてそれを速やかに終えられる。」ローマ9:28参照。

「土や削りくず、砂やあらゆる種類のごみ」は、1844年の秋以来、再臨信徒の間に持ち込まれてきた多種多様な誤りを表している。ここではそのうちのいくつかを取り上げる。

1. 「真夜中の叫び」が発せられた直後に、幾人かの「羊飼い」たちが僭越にも取った立場がある。すなわち、第七の月の運動に伴った聖霊の厳粛にして心を溶かす力はメスメリズムの影響にすぎない、という立場である。ジョージ・ストーズは、この立場を最初にとった者の一人であった。ニューヨーク市で当時刊行されていた『Midnight Cry』紙の1844年後半における彼の著述を見よ。J・V・ハイムズは、1845年春のオールバニ会議で、第七の月の運動は七フィートの深さのメスメリズムを生み出したと言った。これは、その場においてその発言を聞いた人から私が聞いたことである。第七の月の叫びに積極的に関わった他の者たちも、その後、その運動を悪魔のわざだと断言した。キリストと聖霊のみわざを悪魔のものに帰することは、わたしたちの救い主の時代において冒瀆であったし、今もなお冒瀆である。

2. 確定した時期に関する数多くの試み。1844年に2300日の期間が終わって以来、その終結の時期が、さまざまな人々によって何度も定められてきた。こうした行為によって彼らは「道標」を取り払ってしまい、再臨運動全体に暗闇と疑いを投げかけた。

3. 心霊主義—そのあらゆる奇想や放縦とともに、悪魔のこの策略は、恐るべき死の業を成し遂げており、「削りくず」や「あらゆるがらくた」によってきわめて適切に表されている。心霊主義という毒を飲み干した多くの者は、われわれが過去に経験した

再臨運動の真理を認め、そしてこの事実から、1843年と1844年に神が大いなる再臨運動を導かれたと信じることの当然の結実が心靈主義であると、多くの人々が信じさせられてきた。ペテロは、「彼らを贖われた主をさえ否定し、滅びに至らせる異端を持ち込む者たち」について語り、こう言っている。「彼らのゆえに、真理の道は悪く言われるであろう。」

4. 「預言者エリヤ」を自称する S. S. Snow この男は、その奇妙で荒々しい歩みの中で、この死のわざにも一役買っており、その行路は、多くの誠実な魂の目には、待ち望む聖徒たちの真の立場に悪評を招く傾向があった。

この誤謬の目録には、さらに多くを挙げることができる。例えば、黙示録20章4節・7節の「千年」を過去のものとする解釈、黙示録7章4節および14章1節の14万4千人、キリストの復活後に「よみがえって墓から出てきた」者たち、行い不要の教義、幼児滅亡の教義、等々。

これらの誤りはきわめて熱心に広められ、待ち望む群れに押しつけられたので、ミラー兄弟がその夢を見た時には、真の宝石は「目から隠され」ており、預言者の言葉が当てはまる有様であった。「そして裁きは後ろへ退けられ、公義は遠くに立っている」等々。イザヤ書59章14節を見よ。当時、この国には現在の真理の大義を擁護する再臨派の新聞は一紙もなかった。『The Day-Dawn』は小さな群れの真の立場を擁護した最後のものだったが、主がミラー兄弟にこの夢をお与えになる数か月前に廃刊となり、その最後のあがきの中で、疲れ嘆く聖徒たちに、当時から三十年先の未来にあたる1877年を最終的解放の時として指し示した。ああ、ああ！この悲惨な有様を前に、ミラー兄弟が夢の中で「座り込んで泣いた」としても不思議ではない。

1849年12月22日、ミラー兄弟は息を引き取り、これは彼の夢の中の次の言葉——「喧騒の中で、私はつかの間、目を閉じた」——を成就した。この驚くべき成就是あまりにも明白で、誰一人としてそれを見落とす者はいない。

その宝石箱は、十人の乙女のたとえ [マタイ25:1-11] に示されているとおり、ブラザー・ミラーが世界に公表した再臨の真理を表している。第一に時、1843年。第二に待機の時。第三に、1844年の第七の月における真夜中の叫び。そして第四に、閉ざされた戸。1843年以来、再臨に関する出版物を読んだ者であれば、ブラザー・ミラーが再臨史においてこれら四つの重要点を提唱してきたことを否定する者はいないだろう。この調和のとれた真理の体系、すなわち「宝石箱」は、自らの経験を退け、ブラザー・ミラーとともに世界に向かってあれほど恐れずに宣べ伝えたまさにその真理を否定した者たちによって、引き裂かれて断片となり、がらくたの中に散らされてしまった。

そのとき教会は純潔となり、「神の御座の前で責められるところのない者」となる。自らのすべての誤り、過失、罪を告白し、キリストの血によってそれらが洗い清められ、消し去られたので、彼らは「しみやしわ、その他そのようなものは何一つない」者となる。そのとき彼らは「かつての栄光の十倍」に輝く。 JAMES WHITE
Oswego、1850年5月。